
香麗の転校生

海苔巻蜥蜴

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

香麗の転校生

【コード】

N9879N

【作者名】

海苔巻蜥蜴

【あらすじ】

奇妙な学園に、奇妙な指令を受けてやって来た青年。指令通りに動き、同時にオイシイ思いも出来る。最高の学園生活の筈だった。

あの日、自分が殺人者になるまでは…

プロローグ

随分と楽しみにして来たのだろう。少年は自動ドアの速度さえ待ち切れず、勢い良く館内へと飛び込んだ。無垢なその瞳には、入口にあつた”静かにしましょう”と”走るな”の表示は意味を持つまい。彼の足に迷いは感じられない。既に行く先を決めてから此処にやって来たと見える。お目当ての箇所辿り着くと、さっきまでの勢いは何処へやら。何度か背伸びを繰り返し、動きを止め、今にも泣き出しそうな顔になっている。

向こうの方から、髪を束ねた女性が小走りでそこに向かって来ている。年の頃20代半ばだろうか。優しそうな顔立ちで中々の美人ときている。魅力的な女性であることに疑いの余地はない。何せ………いや………今はよそう。

「コラ、タカくん！図書館の中は走っちゃ行けないの！お姉ちゃん、前にも言ったでしょ？」

言葉は怒っているが、少年への優しさがにじみ出ている口調だ。彼も察知しているのだろう。安心しきっている。

「あ、ユキ姉ちゃん！あの本取ってよ！あの緑色のヤツ！上にある第一巻！届かないんだ……」

なるほど……先程の背伸びはそういうことか。

「はい、第一巻。でも渡してあげないよ、タカくんが、もう二度と図書館で走りませんって言うまでは。」

「ええー何でだよ！？せっかく小学生になったからさ、推理小説読んで良いってお母さんが言ったんだよ！早く貸してよ！お姉ちゃん

の意地悪！」

「あ、そっか。昨日から小学生だもんね。早いね。でも…何でこの本なの？推理小説だったら、もっと読みやすいのが下に…」
女性が言い終えない内に少年が割って入った。

「これじゃなきゃ駄目なの！日向さんヒュウカのじゃなきゃ……………僕、絶対に日向さんみたいな凄い探偵になるんだから！」
少年の純粋な訴えは、どうやら受け入れられそうだ。

「分かった。貸してあげる。その代わりに…この緑色のはまだ駄目。」
女性は、悪戯っぽく少年に舌を出して見せた。いやはや…美人の見せるこういう表情も眩しいものだ。

「何でだよー日向さんのじゃなきゃ駄目って言うてるだろー？」
少年よ。口を慎みたまえ。後10年もすれば、今君の前にいるような美人には、決してそのような話し方はしないだろう。

「確かにこれは、日向さんの事件が載ってるけど…もっとお勧めのがこっちにあるわ。」
”もっと”という言葉が少年を動かした。女性に付いて行き、カウンターへ。

「この本よ！世界に1つだけ。日向さん本人が書いたの。香麗の転校生。」

第1章「仕事」 臨海の学び舎にて

私の名前は日向淳史^{ヒユウガアツシ}。しがない探偵だ。本日思いたったのは、私に探偵になるキツカケを与えた経験を書き留めておくことだ。しかし、堂々と人に見せられる代物ではない。何せ私があの場合に出向いたそもそもの動機は、不純であること極まりなく、それゆえ戒めの意も込めつつ自身の為に記録しておこうという運びだ。もし私が…万が一にも将来家族を設けることがあるならば、この馬鹿な父親の若き日の経験を笑い飛ばして頂きたい。

私が18の頃の話だ。当時の私は高校卒業後、進学する気・就職する気・追いかけたい夢…いずれも持ち合わせていなかった。だが両親に啖呵をきつた手前、一人暮らしを始めざるを得なくなり、家賃と食費を稼ぐ手段として多岐に渡るアルバイトに明け暮れていた。以上は第三者から見た私の建前である。事実であることは否定しない。当時の私の所行には特別な理由があった。あの頃、私は宏美^{ヒロミ}という女に夢中であった。文字通り溺れていた。彼女の体は完璧だった。来る日も来る日も彼女を欲した。忘れてくれるな。18歳の時の話だ。まだ愛とは何たるかなど悟っておらず、肉体的な繋がりだけを求め続けていた。私も若かったのだ。彼女も寂しかったのだろう。拒みもせず私を受け入れ続けた。そのうち、私と彼女の二人分の金銭が必要になった。彼女には働いて欲しくなかった。あの肉体に興味を示さない男が居る筈がない。私もまた男ゆえ確信していた。彼女も喜んだ。今思い返せば、一家の主と専業主婦の真似事にお互いが自己満足していたのだ。

とにかく、少しでも多くの金銭を…その思いが、少々怪しくても給料の高いアルバイトへと私を誘った。本当に色々やった。確実に犯罪に関係していそうな物もあった。やはり収入は良かった。

所詮は中身の無い愛だった。当然と言えば当然。段々と私は疲れて来た。以前のように彼女の体を求めることも減って行った。しばらくして、彼女も私への感情に変化を示し始めた。そして彼女は去った。ただ一言”さようなら”の置き手紙を残して。彼女は去ったが、私には一つの習慣が残った。それというのは、高収入のアルバイトを探し求める癖だ。

ある日私は、とんでもない日給の高さの求人を見つけた。流石の私も怪しんだのだが、面接だけ受けてみようと考えた。その求人はこのようなものだった。

学歴問いません。健康な男性で18歳以上。

日給：1〜3万円

業務：学園内での雑用

詳細は面接にてご説明致します。下記にご連絡下さい。

仮に現在このような求人があったとしても十分な額だろうが、私がこれを見た時の金銭感覚からすると、これは異常と言えるぐらいに破格の日給だった。

そして面接の日：私は顔の見えない面接官と対峙した。胸より上にブラックフィルムが貼られたガラス窓を挟み、こちらに私で向こうに面接官。奇妙な面接だった。向こうは口が開けないのか？筆談によってやりとりが進んだ。無論、私は口を開いて質問した。やりとりの際に得た情報をまとめると、大体こうなる。

ある私立の高校で、緊急を要する事態が発生した。職員達だけでは対応しかねている。だが公にはしたくない。高校は女子校で、教職員も校長ともう一人を除いて女性だから男手が必要とされている。私立の女学校は儲けているらしく、報酬に糸目はつけない、とのことであった。

奇妙な面接と面接官に、不信感をこの上なく募らせていた私だったが、妙に納得してしまっていた。高額の日給と変わった条件：そのつじつまが合っているように思えた。何より、職場の環境が私の心を打った。女子校で教職員もほとんど女！まさに夢見るような職場である。宏美と別れ、とにかく自分が”良い”と思つた女を追いかけ回していた私にとって、これ以上ない最高のアルバイトだと思つた。そして私は、その話に直ぐに飛び付いた。

私立^{コウリョ}香麗学園。学校生誕30年以上を数えるこの女子校は、寮生活が義務付けられている。1学年1クラスの40人。中高一貫校だが、この香麗に来られるのは選抜試験をパスした40名だけらしい。校舎は、海を一望出来る小高い丘の上に位置し、その丘と森を抜けた所に寮。花堂^{カドウ}がある。そして花堂の先、街に出られる唯一の道を隔てるのが：5メートル以上はあると言う鉄柵と有刺鉄線。鉄のカーテンを彷彿させるソレは、学園と世間とを隔離している。5センチ間隔で打ち込まれている柵には、横に走る柵は無く、よじ登ることは叶わない。どんなにスレンダーでも、すり抜けるのは無理だろう。

私はその柵のただ一つの継ぎ目：香麗の正門に立った。奇妙な依頼だけあって、奇妙な学園だ。潮風は心地良いが、学園の雰囲気は重い。私は、怖々と正門右にあるベルを鳴らした。しばらくして、年

長の女性がこちらに歩いて来た。

○○○○

「おはようございます。日向さんでいらっしやいますか？」

「はい…そうです。」

いくつぐらいかな？40は超えてるな。最低でも教科主任ぐらいだろう。

「私、当香麗学園の教頭の秋本と申します。アキモト本日はお早い時間帯に
すいません。」

「いえいえ。ご丁寧に、どうも。」

これはこれは、教頭先生だったか。そりゃあこれぐらいの貫禄あつて当然だな。っていうか何だ！？その格好…よく見れば、ウサギのキャラクターのプリントTシャツ着てるよ。

7

「ん？………あー…これですか？これはウサちゃんです。」
うわー目線で気付かれた！しかも名前そのまんまかい！ウサちゃん
って何だよ！

「はあ…」

めっちゃめっちゃ反応に困る。失礼なことも言えないし…どうすりゃ良いんだ。

「全く…初対面の人は皆そんな反応します。ウサちゃんの可愛さが
分からないなんて、人々の感覚はどうなっちゃったんでしょうか。
ああ嘆かわしい！」

アンタ初対面の人に毎回こうなのか？反応に困るのは当然じゃない

か。アンタのその感覚の方が嘆かわしいわ！

「コホン！…私またとり乱してしまいました。ウサちゃんのこととなるについ…えー日向さん！」

「は…はい！」

急に真面目になるなよ！声ちょっと裏返ってしまったじゃねーか。

「まずは校長の方から、業務の詳細について説明させて頂きます。私に付いて来て下さい。」

「分かりました。」

あー…やっとウサちゃんから解放された。それにしても本当に別世界だな。入るにも出るにもこの門だけか。で…っってもう閉まつてるし！教頭が閉めたのか？

「あ、あの…教頭先生。」

「どうかしましたか？それと…私のことはウサちゃんって呼んで頂いて結構ですよ。」

「はあ。」

はあ？いやいや…意味分かんねー！呼べるかよ！何で真顔？冗談なのか何なのかも分かんねー！

「あの正門って、どうやって閉まったんですか？」

「あれは、制御室からしか開閉出来ないようになってます。制御室からは正門の開閉、校舎内の監視、寮の警備が一樣に出来るようになってます。後で紹介しますが、作業員の中塚さんナカツカがやってくれます。彼は数少ない男性の職員なので、日向さんも仲良く出来ると思いますよ。」

「中塚さんですね。制御室か…」

まあ当たり前だな。これだけの敷地を管理するとなれば、それ相應の厳重な警備システムが必要だ。どうでも良いけど寒いなあー……
… 上着持つてくれば良かったな。おっ！これが寮か！女子校だから女子しか居ないんだよなあ………良い！凄く良いぞ！……
… 高校生………体は十分大人なみだからな。へっへっへ……

「これが我が学園の寮。花堂です。1階が1年、2階が2年、3年は3階を使っています。各学年40名ずつ、4人部屋で生活しています。日向さんにも、朝と夜はこちらで食べて頂くことになりました。」

「そうですか。はい。」

ラッキーじゃないか、おい！無条件で女子寮に入れる。最高の仕事だな。しかも夜もOKとはついてるぜ。上手くやれば……

「分かっているとは思いますが、ただでさえ女子校に男性が来るというだけで生徒に大きな影響があります。くれぐれも破廉恥な行動は慎んで下さいね。」

「ええ、それはもう……」

いや、分かっているけどさ……この環境でそれは生殺しだぜ。今は窓から誰も顔を出してなさそうだ。まだ6時だしな。眠ってるんだろう………って、お！一人こっち見てる娘がいるぞ！2階の部屋だから……2年生か。中々美人だな。うわ、手振って来た！

「ウサちゃん！その人だあれ？新しい先生？」

俺じゃなくて教頭かよ。しかもウサちゃんって呼んでるし！生徒は皆ウサちゃんって呼んでるのか？

「相変わらず朝早いよね、前田さん^{マエダ}。この子は日向くん。転校生よ。正確には交換生。」

くん？転校生？何言ってるんだこの人？ウサチャ……………俺も知らない間にウサちゃんって言ってる。教頭の顔は真面目だし、ここは合わせておくか。

「おはよう、前田さん。日向です。よろしく。」

「どうも。ウチ来るのは良いけどさー、やらしいことしないでねー！キヤハツ！じゃあねー！」

何だあの娘…俺は決して、やらしいことなんか考え…考えて…考えてな…考えてるな。

「あなたが頭のキレる方で助かりました。本当は後で校長先生に説明して頂く手筈だったのですが、早起きの前田さんを忘れておりました。あなたは転校生として振る舞ってもらおう予定です。」

「転校生？でも…ここ女子校じゃないですか。」

「その通りです。但し、姉妹校からの成績優秀な交換生は途中で転校可能なのです。姉妹校は男子校なので、転校生が来ると教育上良くないのでは、という意見もあったようですが、何せ成績がからつきしで…あなたが本校初めての転校生という設定です。書面だけの規約と思われていましたが、あなたを招くこの時に役立ちました。」

「へえー…」

いよいよ意味不明な学校だ。

遠くに見える寮がどんどん縮まって行く。前を見れば、薄暗い森が広がっていた。ウサちゃんは躊躇せず入って行く。

「ところで…日向さんは、幽霊の類は信じておられますか？」
いかにもこの森は出るって感じの問いだな。

「私は…あまりそういうのは信じませんね。」

「そうですか。でも一応、忠告しておきますよ。この森には入らない方が良いでしょう。必ずあなたに悪いことが起こりますよ。」
うおー！入るなって言われると無性に入りたくなるじゃないか。そこから辺察してくれよ。

「…悪いこと？まさか幽霊に呪われるとか？」

「そういう噂です。ほら、あそこに古い洋館が見えますでしょ？あれは生徒達の言う”呪いの館”です。面白半分で肝試しに行った生徒は、翌朝死体になって発見されました。課外授業以外でこの森に入った生徒は、必ず行方不明になっています。」

「確かに…入らない方が良さそうですね。」
洋館ってだけでも不気味だが、蔦が白塗りの壁、煉瓦作りの煙突と屋根、ステンドグラスの窓をもびっしりと覆い尽くしている。入口に届くまでに鬱蒼と雑草が茂っていて、まさに怪しげな雰囲気だ。あまりこの森と洋館には関わらないようにしよう。

「あ、見えました。あちらが校舎です。」
薄暗い森の出口付近、華麗な出立ちのそれが垣間見える。近づくにつれ、まるでヨーロッパの名ある教会のような校舎が、徐々にその全貌を明らかにして行く。花堂と同じく3階立てだが、正面玄関の真上 屋上の位置にはテラスがあり、小さめの鐘が確認出来る。

「あの上…良い雰囲気のレストランですね。あの鐘も。」

「テラスというか、ほぼ校長室ですね。雨の日以外、校長先生はあそこに居らっしゃいます。授業の終始のチャイムも、校長先生ご自身があの鐘を鳴らされます。学童集会の際もあそこから話されます。日向さんにも、今からあそこに行ってもらいます。校長がお待ちしておりますので。」それつきりウサちゃんは語らなくなった。入ったばかりの僕に説明すべきことがなくなったのかもしれない。無言で彼女を追い、階段を8回登ると、さっき下から見上げていたテラスに到着した。

「す…凄いい！」

自然に口から言葉が出る。これぞ絶景。水平線から円の全てを持ち上げた朝日は、今まで漬かっていた大洋に別れを告げるかのように陽光を与え、海面はそれに応えキラキラとした光の粒で魅了する。全面オーシャンビューとはこのことだ。

これが香麗、臨海の学び舎。

工口親父と美人達

「どうですか。見事な景色でしょう?」

「はい…と、失礼しました。この度、お世話になる日向です。」

「こちらこそ。私が校長の屋敷ヤシキです。よろしく。」

「どうも。」

差し出された右手には、僅かながら皺がある。老眼の眼鏡を首から吊り下げてはいるが、眼光の鋭さは年齢を重ねるにつれ増しているようだ。勿論、俺はこの人の若い時を知らない。あくまでイメージの話だ。体型は歳の割には崩れていない。白髪が混った初老の男性だ。

「あの、校長先生…」

「ん?どうかしたかねウサちゃん。」
「…おい!校長までウサちゃんって呼んでんのかよ!教頭の扱いはどうなってんだ?俺が間違ってるのか?いや!心を折られちゃ駄目だ。俺が正常、こいつらが異常なだけだ。」

「実は…ここに着くまでに前田さんと出くわしてしまって、どういう設定で学園に来て頂くかの話のみ、既に私の方から説明する形を取らせて頂きました。」

「そうか。あの娘は早起きだからのう。良いぞ。気にするな。」

「はい。じゃあ…私はこれにて。校長、後よろしくお願いしますね。」

日向さん、せめて学園内でお会いする時は、ウサちゃんとお呼び下さい。生徒達が怪しみますので。では。」
秋本先生は颯爽と去って行った。

「今は疑問だらけだろうが……とにかく先に仕事の話をさせて頂きたい。沢山あるだろう疑問の答えは、後々同僚や生徒から答えを聞いてくだされ。」

「分かりました。」

「さて、まず今この学園が陥っている窮状についてだが……簡単に言うとなんか死んだのだ。」
「ん？このオツサン何気に凄いこと言わなかったか？」

「え？あの……今何と？」

「驚くのも無理はなからう。今一度言う。この学園で人が死んだのだ。」

ああ……聞き間違いを望んだ俺が馬鹿だった。

「人が……死……んだ？」

「左様。一週間前の夜、この校舎でな。しかも殺されたのは職員の内だ。それはともかく、大事なのはこれから話すことなのだ。」
「どうやらここからが本題らしい。校長の目付きが変わった。俺の仕事と関係があるのも、今から話すことに違いない。」

「我々は犯人を見た。もう誰の仕業か知っておるのだ。」

「じゃあ捕ま……」

校長は人差し指を突き立てて俺を制する。

「犯人は恐ろしく強靱な男だ。とてもワシでは叶わない。もう一人、作業員に中塚という男が居るが…彼は持ち場を離れるわけにはいかんだ。」

ほうほう…なるほど。話が見えて来た。制御室を空けるわけには行くまい。かと言って力で劣る女性陣では返り討ちだろう。なるほど確かに緊急事態　だからこそあの求人だったのだ。しかし自然な疑問が1つ残る。

「だったら警察に…」

再び人指し指が見える。

「ああそうだな。本来ならそうすべきだな。皆分かっておるのだ。少々厄介な事情が絡んでおつてな……まあ……その……何だ。うん。聞かないでおいとけると嬉しいのだ。そういう意味も含めて、こちらもある金額を提示しているのだよ。」

何だか分かんが、これ以上無い分かりやすさで口を濁したんだ。突っ込まれたくない事情があるのは確かだ。俺としても、あの額が貰えりゃ何の文句も無い。この学園の諸事情に首を突っ込もうとも思わない。

「別に気にしませんよ。あれだけ貰えれば。バイトの男なので。」

少し安心させてやろうと、笑顔の緩和剤を添えて言葉を送り出す。

「いや、本当に…日向さんが話のわかる方で助かりました。腕っぷしもお強そうですね。」

よほど気にかけていたのだ。間違い無い。ほんの数秒前までの深刻な顔は何処へやら…満面の笑みの校長。やっぱり年寄りには笑うと若く見えるなあ。今思い返せば、ウサちゃんも兎トークしてる時は若く見えた。

「ウサちゃんが言っただように、生徒達の前ではあなたはあくまで転校生です。だが教職員達にはきちんと紹介しておきたい。短い間だが、共に働いて貰うことになるし、歳が近い教師も何人か居るしな。若い美人が多いぞ。グヒヒ：美人、好きだろ？」

このオッサン：てんでキャラ違うじゃねーか！俺が学園の事情を気にしないって分かってから、物凄くフランクに接し始めたぞ。まあ、こういう方が俺も接しやすい。立つ鳥後を濁さず：無難に楽しくがモットーの俺にとっちゃ好都合だ。適当に合わせておこつ。ま：合わせるまでもない。だって実際、美人は大好きだ。

「校長先生も隅に置けないっスねー」

「フォツフォツ：5年ぐらいで入れ替え人事をしておるのだ。美人も当たり前だが：いつも若くてピチピチの娘を見ていたいからな！ガツハハハハアア：」

おいおい：冗談なのか本気なのか？本気だとしたら職権乱用も甚だしいぜ。しかし男としては叶えたい夢でもある。俺：何処かの校長でも目指そうかな。

「日向さん、アンタは運が良い！今年度入れ替えをしたばかりだ。私のお勧めはな、美穂ちゃんと紗也ちゃんじゃな。美穂ちゃんはな、良い脚と良いケツしとるんだ！でな、紗也ちゃんはポインだ。ポイン！」

ジジイ：思いつきりエロ目線だな。美穂ちゃんと紗也ちゃんな、よし！………ってすっかり覚えてる俺！流石は男だな。うん。僅かに冗談かもしれないって考えもしたが、職権乱用の方向は嘘じゃないらしい。

それから、ジジイのセクハラトークに止む気配は全く無く、延々と歴代の美人教師について語り続けた。おかげで職員室までの道のり

はあつという間だった。色々聞いたが、やっぱり校長の職権乱用で人事が決まっている…らしい（ほぼ決定的だが倫理的な面を考慮して”らしい”ってコトにしておく）、ということしか印象に残っていない。この香麗学園で教師として働き続けるには、あのエロジジイのお眼鏡に叶い、尚且つ5年ごとに巡る人事の際にジジイに飽きられないことが必須事項なのだ。

「さ、着いたぞ。今日は職員達には早目に集まって貰っていてな。学校特有の引き戸の敷居を、ジジイに続いて跨いで入る。入ってすぐ”ほぼ決定的”が”完全”に変わった。ジジイ……マジでやりやがった。既に知っているウサちゃん、中々の男前の中塚さん（学園内で校長以外に男は一人だから絶対そうだ）、中世の富豪の屋敷に似合いそうなメイド服のおばさん…この3名を除く教職員全員が若い女。綺麗・可愛い・スタイルが良い・雰囲気…最低1つはジジイの要求を満たしている。もし誰かが訴えたらこのエロ親父に勝目はねーぞ。」

「今日は早くからすまんね。皆も知っている通り、一刻も早く奴を捕まえにやならん。こちら日向さんだ。」

「初めまして。日向です。よろしくお願いします。」

「日向さん、一気に全員覚えるのは無理と思うが、一応今から皆に名前だけでも言ってもらっぞ。」

「ええ…わざわざすみませんね。」

「じゃあ私の左から順にグルッと一周で。最初はキミからだ。」

「はい！」

指名されたのは巻き髪の大人美人だ。背も高い。少し落ち着いて見

えるから…最低1回は、あの目茶苦茶な人事を掻い潜った可能性が高い。

「進藤由香利シンドウユウカリです。担当は英語で、ここに勤めて6年目です。よろしく。」

ビンゴ！今年のセクハラ人事の合格者だ。綺麗なお姉さまって感じだな。ダークブラウンの髪の色が似合っている。魅力的だ。本当に視力が悪いのかは別として、眼鏡がエロい。

「よろしく。」

「おはようございます。石田美穂イシダミホです。担当は理科でえー、今年入ったばかりです。日向さんは同い年だからあー…仲良くしてねっ！」

この娘がジジイのお勧め…美穂ちゃんか…なるほど。個人的な好みを通せば、俺はこういう口調の女は嫌いだ。ただ…そのムカムカを吹き飛ばして余りある美脚と魅力的な丸いヒップは、ジジイの心を捉えるには十分だ。

「僕は中塚と言います。教員ではなく、警備員として此処に居ます。話し相手が増えそうで良かった。よろしくどうぞ。」

「どうも。」

前々のお辞儀より、やや深く一礼する。俺のわからないところで、俺自身が男という希少人種を意識した、と思われる。この人が制御室を一手に引き受けている中塚さんだな。こっちとしても、男の会話が出来る話し相手が居てくれた方が単純に嬉しい。

「おはようございます。私は、濱田ハマダタエと申します。3度のお食事のお世話を仰せ遣っております。マナーはしっかりと、綺麗な食べ

方を！」

「……………はい。」

えっと…メイド服だけど…まあ言うなら給食のおばさんってところだな。マナーには厳しいと睨んだ。最後の台詞の時だけ見せた鬼の形相は、俺もちよっと気圧された。

「わ…わたしは、は…濱田さんの…お…お手伝いをしている…た…
タカハシアキコ高橋晃子と…い…言います。ひ…日向さん、は…早く犯人捕まえて下さいね。」

「ええ。頑張ります。」

何だこの吃り方…半端じゃねーぞ。丸い分厚い眼鏡の奥で、今にも泣き出しそうな目をしている。華奢な体も小刻みに震え、緊張しているのか、何かに怯えているのか、とにかく間違っても教壇に立てるタイプの娘ではない。給食手伝いで良かったよ。

「高橋さん、何回も言わせないですよ！もっとハッキリ喋って！」
よく分からんが、この童顔の巨乳ちゃんが高橋さんを嫌っているらしい。

「…ごめんなさい。」

「初めまして日向さん。私は、国語と社会を担当している、ヨシダ吉田紗也サヤです。何か分からないことがあったら、呼び止めて聞いて下さいね！」

「ありがとうございます。助かります。」

予想的中…このたわわな娘が、エロ親父の言うところのポインちゃん。こりゃあ文句無しで採用だな。

「おはようございます。保健体育担当の、佐藤凜サトウリンです。ちょっと失礼かもしれないけど、最近あなたみたいな年下の男性は可愛いのが可愛いがって欲しくなったら、何時でも保健室にいらっしやい。フフ…」

「あーやつぱりあの親父…保健の先生にこのタイプを持って来やがったか。酸いも甘いも知り尽くした、妖艶な雰囲気的女性だ。歳はさほど濱田さんと変わらないのだろうが、堪んねー…」

「あら、何赤くなってるのかしら？ジョークよ、ジョーク。」
赤くなってるねーよ！佐藤先生は気をつけよう。十中八九、俺のペー
スになりはしない。

「まあまあ凜ちゃん、そうからかってやるな。日向くんはまだ二十歳なのでな。さ、皆ご苦労だった。15分後には朝礼が始まる。生徒達も大方集まって来とるだろう。今日も一日、頼んでおくよ。」

「はい！」

「では日向くん、君が転校生として入るクラスは2年2組だ。これからのことは、最初に自己紹介したこの由香利ちゃんから聞いてくれ。2年2組は彼女が担任をしているクラスだ。」

「わかりました。」

最初に自己紹介した先生だから、ああ…この巻き髪眼鏡美人か。

「よろしくね、日向さん。生徒の前では、私は先生で日向さんは生徒です。ボロ…出さないで下さいよ？」

「分かっています。」

こうして、俺の香麗学園での生活がスタートした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9879n/>

香麗の転校生

2010年10月13日03時33分発行